



**Data**

監督・脚本: イルディコー・エニエ  
 ディ

出演: アレクサンドラ・ボルベーイ  
 /ゲーザ・モルチャーニ/レ  
 ーカ・テンキ/エルヴィン・  
 ナジ

### ■ショートコメント■

◆第70回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞した『ザ・スクエア 思いやりの聖域』(17年)はクソ難しい映画だったが、2017年の第67回ベルリン国際映画祭で金熊賞<最高賞>など4冠を受賞した本作も、クソ難しい映画。その諷い文句は「若い女と中年男 孤独な二人を結びつけたのは“鹿”の夢 ファンタジックでリアルな愛の物語」だ。何度も観た予告編では、美しい森の中を散歩したり、じゃれあったり(?)するオスとメスの鹿の姿が登場していたが、さて・・・?

「夢」をテーマにした映画はたくさんあるが、そもそも別の人間(男と女)が同じ夢を見るなんてことがありうるの?それが本作のテーマだが、そもそも夢はその内容をハッキリ覚えていること自体が少ないうえ、それを人にしゃべる機会もないのが普通。だのになぜ、本作ではそんなストーリーが可能なの?

◆本作の舞台はハンガリー、ブタペスト郊外の食肉処理場。そこでは毎日のように牛を屠殺しており、導入部では牛の血をいっぱい流す屠殺シーンが登場するので、それに注目!

本作の主人公は左手が不自由な管理職の男・エンドレ(ゲーザ・モルチャーニ)と、代理職員として新しく入ってきた若く美しい女性・マーリア(アレクサンドラ・ボルベーイ)の2人。彼らが自分の夢の話をしたのは、ある日その職場で牛用の交尾薬が盗まれる事件が発生したことによって、職場の全員が精神分析医のクラーラ(レーカ・テンキ)からの不躰で執拗な質問に答えざるをえなかったためだ。そんな情報は極めて秘密度の高い「個人情報」だから、クラーラはそれを自分の胸の内だけにしまっておくべきが当然だが、本作ではエンドレとマーリアが同じ鹿の夢を見ていることを互いに知ってしまうところがミソ。それによって2人が急接近したのは当然だが、2人の仲がスナナリ進まないところが、これまたクソ難しい映画の特徴だ。

◆牛用の交尾薬を人間の男が飲めばどの程度の効用があるのかは知らないが、今のエンドレは、既に女を卒業してしまっているらしい。他方、コミュニケーションが苦手な女性マーリアの行動は何かと型破り、というよりかなり異常気味。これでは友人がいないのは当然だし、職場での協調性を保てないのも仕方ない。それがわかりつつ、エンドレがマーリアに接近しようとしたのは、きっと彼女の美しさのためだろう。しかし、エンドレは女を卒業したはずではなかったの・・・？

エンドレがマーリアに急接近していったのは、牛用の交尾薬を飲んだからではなく、同じ夢をみる2人は当然結ばれるべき人間同士だったから、らしいが、私にはどうもその点がイマイチ・・・？さらに、この2人は夢の中ではありのままの姿でいられるのに、現実世界では2人の恋は一筋縄には進まないばかりか、ベッドインした中でこの2人が見せる性愛の姿は、こりゃ如何なもの・・・？

◆キネマ旬報5月上旬特別号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、3人の評論家が星4つ、4つ、5つをつけているが、私は本作の出来にそれほど感心できない。しかし、イルディコー・エニエディ監督は長編デビュー作たる『私の20世紀』(89年)でカンヌ国際映画祭カメラドール<最優秀新人賞>を受賞した監督で、本作は彼が18年ぶりに発表した映画らしいから、今後の活躍に注目！また、アレクサンドラ・ボルバーイは本作でヨーロッパ映画賞最優秀女優賞を受賞したそうだから、今後も華原朋美にちょっと似たハンガリーの美人女優の活躍に注目したい。

2018(平成30)年5月12日記